シンポジウム—1—

”教育を考える“

— 労働者階級に教育を奪い取る為に

出席（予定）　東京都非常勤講師労組　　日本教育新聞労組
全逓信労組　　教育出版労組
三鷹高橋さんを守る会　　滝川さんを支援する会　その他

私達が「教育」を考える場合、明大の二部の学生と言う存在を抜きに考え得ない。しかも、私達は”学費闘争の永続的展開“を訴え、闘い抜いている。単なる理念やスローガンとしてではなく、具体的な現実として”教育を我がものとする“方策を明らかにしよう。その為に各労組活動家を招請した。

〔私達の闘い（二部学生存在）〕

私達は、一人一人が各々の事情で明大二部に入学した。それは、二部学生＝勤労学生と言う範ちゅうに収約されるものではない。私達の闘いは、各々の問題意識を発展させ、各々が共同して豊かな闘いとならんとするものである。二部学生の闘いとは、それが言葉でなく、具体的に展開されねばならない。「経済的事情「入試」等の事情で入学し、定職を持つ者、バイトで生活する者、転部しようとする者、資格を取ろうとする者、働きながら「勉強」する事に何かを求める者‥‥文句なく一人一人が様々な目的を持っている。

今、「第三の教育改革」の声も高く進められている教育の帝国主義的再編は、「勤労青少年教育」として二部制度にも及ぼうとしている。私達は、「能力別」「多様性」の教育として、勤労青少年教育制度の改善を行う、という教改革」を受けるわけにはいかない。何故ならば、その「改革」は、今迄私達が経て来た「差別一選別教育」の強化に外ならない故に。私達二部学生は、大学制度下において差別的条件下に居る。しかし同時に、「義務教育」から「試験」で競争し、選別され、差別されてここに居るのでもある。この社会において、”差別“はくり返し資本家階級＝支配者の手段とされている。今、「教育」は資本の要請にどれ程応える事が出来るのか、と言う事で行われている。

私達の闘いとは、二部制の統廃合に反対する闘いから、差別一選別教育体制そのものを粉砕する闘いへと進まねばならない。

〔労働者の闘い一教育をめぐる闘い〕

私達はここに労働者を招請した。教育現場で働く労働者。資本のマル生（生産性向上運動）攻撃として職場内位階性が”職場内再教育＝研修“をもって確立される事を粉砕している労働者。教育関係の新聞や出版産別に働く労働者。

教育は学生と教育者の問題にしようとしているのは支配者である。労働力政策の柱として教育が考えられているのだ。それは涯涯教育一社会教育として、労働者の「能力開発」を生まれて死ぬまで”強制“しようとしている。大学院大学での高級技術一管理層の産出。そして、企業内再教育の強化が行われようとしているのだ。これらは、単に「能力」や特殊の獲得なのではない。近代的労務管理の導入として、企業一社会を貫く”位階制“へくり込まれ、分断、支配の下に強制される事となる。

労働者に取って、自己の労働を支配し管理する闘いの一歩は、”教育“を自らの手に奪取する事から始まると言ってもよいだろう。そして、ここに「教育闘争＝学生運動」と言う既成の範ちゅうを越えて、労働者自身に取っての”教育闘争“が開始されている。

〔二部学生一労働者を貫く闘い〕

私達は、闘いを、理念やイデオロギー獲得に窮々とするつもりはない。　私達は、私達の闘いの発展をそれぞれの現場で闘い抜いている労働者一学生の交流から始めよう。労学共闘とは、学生が労働者へ無条件に拝跪し、実は精神労働者としてヘイゲイする事（日共一革マル）ではない。各々の闘いの根源を共同して撃つ事である。労働者一学生の両者の社会的存在の只中で、共に自らの解放を他者と共同して獲得する事である。　私達は、71年以来「教育を労働者階級の手に奪還する為に」として、千代田地区の労組員、各地、各産別の闘う臨時労働者を招請し、闘いの交流を行って来た。そして、私達はこのシンポジウムにおいて、各々の労働者の闘いの報告を受けると同じに、それと私達二部学生の闘いの展望を、”労学共闘“としてどたで、何をもって闘い得るのかを討論していきたい。このシンポジウムにおいて、まずみなさんが、職場で働きつつも”労働者としての闘い“に不問であったり、各地、各産別の闘いが無縁と思われたりするのではなく、自分の存在に深く結ぶものである事を知られ、今後の一人一人の”生き様“をより豊富化される一助とならん事を願い提起する。